

モグラの兵隊

(第3部)

博物館動物園駅
京成電鉄株式会社

カナタ ムメイ

小林のバックハンド・ブローを受けた村長は小林を睨みつけた。殴打は何度も続き、終いに村長は項垂れてしまった。殴り飽きた小林は拳に痛みを感じ、お湯を張ったボールの中で拳をほぐしていた。拷問部屋は村長のうめき声のほかは無音だった。

一階下のフロアで私は苛立っていたが、傍には背の高い係員が始終見張っている。この係員は無言で、私の提案を一切受け付けない。取引にも応じない。再教育というのは間違っていると話しても無言だった。共犯なんだよ、と脅しても態度を一切変えなかった。忠実な係員であった。

ユキは事務所の窓口にあった。事務所奥のロッカーに黄色いキャップがあるのは分かっていた。事務員が時折ユキがガラス窓をあけようとする、すぐに閉めに来る。何度か繰り返すと、勘弁してください、と困惑して事務員が閉めて、しばらくしてユキが窓を引く。

「ね、いいでしょ、お茶しましょ」

「ですから、分かっているんです、あの所持品でしょ、欲しいのは」

「違うわ」

「じゃ、なんです、ここに入れてくれって、あなたはさっきから言い続けてますよ」

「だから、お茶しましょ、喉がカラカラなの」

「そこに自販機があるでしょ、それ使ってください」

「あたし、お金がないの」

「じゃ、仕方ないですね」

「そんなこと言うなら、先生に言いつけるわ」

「何を言いつけるって言うんですか？」

「だって、あたし広告に出てるから、あんな事務員は評判が悪くなるわって言うわ、それにあなたの名前、知ったから」 確かに事務所の壁にはユキが稲穂を片手に持ち、身を屈めて微笑んでいるポスターがあった。

「先生って小林会長ですか」

「そうよ、言うわ、絶対」

「少しだけですよ」

事務員がドアを開けた。すぐに行動にうつすほどユキも早計でない、事務員に愚痴をこぼし始めた。広告塔の苦勞話、歌は大変辛い練習だということである。そのたびに事務員は緑茶をすすって肯いていた。

「CMのライトってどのくらい眩しいんですか」

「本当はサングラスが必要くらいよ」

「で、その農村の田圃でヒルに吸い付かれたって、大変ですね」

「あのヒルっていやらしいのよ」

「血を吸うんでしょ？聞いた話だと、タバコの火を近づけるとポタポタ落ちるって言っていましたよ」

「ここにも入ってくるの」胸元を指差す。「そして、ここも…。見せてあげようか」

「いいです、いいです、分かりましたよ、でもね、会長には内緒ですよ、ぼくがトイレに行った時に入られたことになるから、ですから、ええ、自分の責任でやってくださいよ」

「ありがと」

黄色いキャップを手に入れたユキは階段を上っていった。

村長が意識を取り戻すと、小林はハンマーを取り出していた。

「村長、いきなり頭じゃ芸がない。皿を割ろう。再教育だ」

下のフロアが騒がしく、中断した小林は降りていった。

すでに私は消えていた。係員がユキを組み伏せている。

「どうした？」

「この女の子が騒いで、やつを逃がしたんですよ」

「歌のレッスンじゃないのか！」

「終わりました」

「ええい、お前も再教育が必要だな、来い！」小林は腕を掴み、係員は入口まで抱えていく。

拷問部屋に近づくと、地響きがした。

係員に、小林は「ここで待機」と命じると、ユキを抱え、回廊の手前で立ち止まった。

事務員が汗をかいて上がってきた。

「あの、会長、一階のフロアがひどいです」

小林と事務員が一階に向った。

係員はじっと命令を守っている。ユキが色仕掛けを試みても変化はなかった。拷問部屋から何か這いずって来る音がした。

係員はそれを見ると、ユキを投げ出して逃げてしまった。両手両足のない女が這って来たのだ。

「大丈夫？」女がユキを見上げていった。

「ええ」ユキが悲しそうな声で言った。

「この上よ」

シケモクが村長の固定具を外しているところだった。

「何、この部屋！」

女が「早くしたほうがいいわ」と言った。村長にキャップを渡し、村長は地面に力なく潜っていった。

シケモクはロッカーに入っていった。女はもう一度縛って欲しい、と言った。

ユキが「逃げましょうよ、一緒に」すると、女は「いいの、ここにいたくっちゃ」と答えた。女は何度も元の位置に戻すように懇願したので、ユキはそのとおりにしたが、一緒に逃げることを考えつづけた。女は、「このどこかのフロアに出口があるのよ」

「なんの？」

「現実の世界への出口」

「知らないわ」

「あるわ、きっと」

「何かこの建物、傾いていない、先から」女が言った。

「崩れるわ、きっと」

誰かが階段を上ってきた。ユキはシケモクのロッカーに入った。

「この子は馬鹿な子」とシケモクが暗闇の中で呟いた。

ロッカーの隙間からユキが覗くと、見知らぬ男が、教壇の上にいる女の縄を切っている。

その男の背中しか見えない。男は女にキャップを渡した。女は滑るように地面に消えた。そしてシケモクが出るのを嫌がっているが、それを無理に引き、ユキと一緒に外に出た。

「まだいたのか、キャップが足りない。」男の顔は黒のフルフェイスのマスクで見えない。「待っていてくれ、応援が来るだろう」脳信号を使い、連絡をした。ユキがシケモクにキャップを譲った。シケモクは地面に消えた。ユキとしばらく男は無言で向き合っていた。

「モグラ…でしょ？」

「ああ」

階段を上がってくる音がした。太った兵隊だった。

「苦しいね、はい、どうぞ」ユキにキャップを手渡した。

「ありがとう」といって、ユキが潜った。拷問部屋に二人の兵隊が残った。

「これで全部だろうか」

太った兵隊が、調べまわると、足音がした。振り返ると、小林の妻だった。フルフェイスの男がヘルメットをそっと置いて、黄色のキャップを被り、妻の体のなかに飛び込んだ。太った兵隊はその後、床に潜った。妻は自室に向った。

「いったいなんなんだ！」小林は爆薬で粉々に崩れた一階を見て叫んだ。事務員は、

「黒子のような連中が壊しまわったんですよ」

「そいつらはどこに？」

「もういません。壊すだけ壊して、消えました」

修復の手配をするように事務員に言い、自分は取締局に連絡を入れようとして、拷問部屋に行くと、誰もいなかった。しばらく立ちつくして、小林は取締局に連絡を入れた。

取締局は、概況ではあるが、今回の協会本部の破壊行動はモグラの活動に違いないだろう、と言い、さらに、キャップの押収が重要と判断しているが、それにはモグラを捕まえなくてはならず、甚だ困難ではあるが、現時点で入手した情報の中にモグラの特性を解明する情報は皆無である、と伝えてきた。

朝、目が覚めると、頭の中で声がした。ノンノン様に聞くと「脳信号」の開通だ、と言った。ユキも聞こえるという。ノンノン様は、眠っている村長の体を拭き終わると、私とユキに「脳信号。幻聴とは違うよ。慣れるまで、混乱するだろうが、聞き分けられるようになる。どんな声だね？」というので、私は「何かテストしているみたいだ」と答えた。

――目ヲ閉ジテ、安心シナサイ。

ユキと私は目を閉じた。星が輝く静寂な宇宙空間に意識が飛んだ感じになった。

――アレヲ御覧ナサイ

――キレイネとユキが言った。

オーロラのようなカーテンを無数の粒がくぐっている。そして、そのカーテンを越すと、上方に行く物と、下方に行く物がある。

――何コレ

――夢世界ニ向ッテイル

――下ニ行クノハ何？

――「シケモク」ト、アナタヲ助ケタ女ノ人

中央を見ると、ダリの絵画が浮かんできた。

――「ダリ」ハ、コレヲ利用シタノダロウカ？

――ゴ名答

目を開けた。ノンノン様がこれからはモグラとの連絡はこんな感じだよ、と答えた。

心理カウンセラーがやってきた。

「村長は？」

「もうじきくたばるよ」

心理カウンセラーは村長の様子を見て、何か一言二言会話を村長とし、お互い笑っていた。

皆が理解できないのは小林を崇拝する協会の考えであった。なぜ、小林を崇拝するのか理解できなかった。というのも、協会がこの世界を悪夢で被い尽くすことを考えているとは思えなかったからだ。それを裏付けるのは先日の小林の講演会での演説内容であった。

「今も眠りつづける協会員がいます。皆さん、モグラの噂をご存知でしょうか、破壊行動をしつづける連中です。これは私たち博愛協会と取締局の力で追放しなくてはなりません。それこそが正しい行動です。なぜ、人は夢を見るのでしょうか、白昼夢を見るのでしょうか、犬が昼間走った草むらを思い出し、愛らしい表情で眠り、足を必死に動かします。子供が指を加えて笑顔になります。夢は生き物にとって必要なのです。それをモグラたちは壊そう、無くそうとしています。あなた方はこの世界に居つづけ、夢を守る役目を志願しました。喜ばしいことです。」

どうやら小林は夢の守護神として協会員に支持され、崇拝されているようだ。

数日経過し脳信号のガイドで、私とユキは夢の入口を案内された。強大な観覧車で次々に送られていた。

村長は日増しに弱ってきた。傍らでノンノン様が面倒を見ている。

「すまないね」

「かまうもんか」

「孫に会えないんだろうか」

「おまえさんもすっかり意気地なしになってさ、昔はとげとげしいくらいの自信家だったじゃないか」

「長く生きすぎたんだ」

「あいつらは今ごろどうしているだろうか」

「ヨウコさんたちかい？」

「ああ」

「モグラの仲間入りだよ」

「年をとってしまっているが、元気そうじゃないか」

「わたしかい？元気だよ、独りもんだからね」

「お互い様だ」

「少し休むよ、私は、あとは勝手にしな」

心理カウンセラーが訪ねたとき、ノンノン様と村長は死んでいた。そして、心理カウンセラーは寺に連絡をし、その足で仕事場に向かい、通常の診察を開始した。

兵隊は取締局の連中を一掃しようと懸命であった。取締局の男は狩をするように兵隊たちを探すのだが、地面から出たり入ったりすることが可能な兵隊たちにはなす術が無かった。一人の局員は脳信号の混乱を狙ったが、地面に兵隊が潜るたびにリセットされるため、脳信号の混乱は無理であった、むしろ兵隊たちが局員同士の信号を混乱に陥れ、局員は脳信号をつかえなくなっていた。

不安な局員ではあったが、表情には出ない。局員は単独で兵隊の確保を狙っていた。

2名の局員が急な坂を上っていた。坂の両側は崖になっていて、崖下には食堂がたくさんあり、飲み屋街の賑わいをして、さらに一軒の家が坂の上に建っていた。その家はモグラたちの住処だという鷹の脳信号に引き寄せられ、局員は向っていたのであった。

家の門扉は壊れていて、半壊した建物であり、家の屋根にはアンテナと赤地に白い丸のついた国旗が一本、あとはぼろきれが棚引いていた。二階の窓には緑の手形がいっぱいついていて。家の周囲を局員は調べ始めた。雨が降り出した。周囲を隈なく探し、局員同士が合流しようとし、目が合った。二人は首を振った。すると、二人の局員はお互い指をさした。局員の後ろに雨に濡れた兵隊がぬっと地面から出た。そして、局員を抱え、地面に引きずり込もうとした。しかし、地面には入らず、砂のように局員は砕けた。引きずり込めないことを知ったモグラは再び地面に飛び込んだ。

そのようにして、モグラたちは地道に局員を始末していった。

一方、小林は協会員を総合集会と称し、集合させ、モグラの一掃運動を鼓舞している最中であった。協会員は演説の最中微動だにできなかった。講堂の一角には布団に包まって眠っている協会員がいたが、多くの者は咳払いも無く、そして並べた椅子に腰掛けた協会員は背筋を伸ばし、脚は右に流していた。というのは、依然小林が教員時代の美談を話したからであった。その話は、朝の朝礼の際に子供たちは長時間立って聞くことを守り、ある生徒が雨が降り出した中、少しも動かず立ち続け、朝礼が終わった時にはその生徒の立った跡だけが雨に濡れていなかったというものだった。心構えとして、このようなことが「できることなら試みて」、そのことを「期待しています」と言ったためであった。

演説は夢世界の破壊から始まったが、それは協会員は繰り返し聞かされて、たいていは分かりきったと考えるはずだが、彼らはこれは重要事項なのだと考えてしまう。

「ですから、あなた方の義務というのは彼ら、つまりモグラたちを一人でも多く捕まえることです。そうすることで、あなた方のいる世界は安泰となります。子供たちがまず優先です。それは博愛の精神から言ってご存知であると思います。そして、病人、年配者、分かっています、あなたたちなら、私がくどくど申し上げなくともよく理解なすっていることでしょう。錯乱したモグラの一掃にご協力してください」と訴えつづけた。講堂の一角で布団に包まって眠っていた協会員も半身を起こし、肯いた。拍手が巻き起こった。それは長い拍手で、小林は涙ぐんだ。

協会員は講堂を出て行き、モグラを探しつづけたが、見つかるはずも無かった。めくらめっぽう探すのだが、どこにもいない。これには作戦を練り直す必要があるということで、何人かが公園に集まった。彼らは公園が好きだった。小林が安くて憩いの場であり、健全な精神の持ち主であれば、このような公共の施設を利用しない人はいないだろう、という考えに従ったためだ。

協会員は公園に五人いた。一人が地面から出てきたモグラに引きずり込まれた。協会員の場合、局員と異なり、砂のように砕けず、素直に地面に引きずり込まれた。四人は手を使ったり、木の枝を使ったりして、公園の地面を乱暴に穿り返していた。一人、また一人、とモグラによって地面に引きずり込まれた。公園には結局一人もいなくなった。

このようにして、協会員の大半は消えた。

小林の妻と兵隊は内声を使って会話をしていた。

――最初、小林は積極的で活動的な教員として教壇に立っておりました。残業もいとわず、夜遅くまで翌日の授業の準備をし、その当時、管理教育盛んであり、文部省から、教育委員会から、校長から、と通達があり、実行しておりました。やりすぎの面もありましたが、妻の私は従うざるを得ませんでした。

生徒の心まで管理するため、日記の提出も義務付けましたし、お便所の中まで見回ったそうです。誤解のないようにいいますが、これは小林だけではありませんでした。皆教師は多かれ少なかれ、管理に手を染めていったのでした。

ですから、今の教育現場で、教員が精神的に打ちのめされるというのも、あの当時の生徒さんたちの怨念みたいなものでございましょう。ですから、私は今の教育現場について、申し上げる立場にはございません。あの当時、小林の同僚で、原川という教師がいました。彼をよく小林は誘っては家に来て、教育談議をいたしておりました。その一方で私はよく存じ上げないのですが、サカサクラゲというところに入り浸っておりました。なんですか、そのサカサクラゲといいますのは？

――知りません。

――そして、原川は毎晩のように家にきては「奥さんの顔を見ると心とみます」などとおっしゃるのです。原川はお酒に溺れる人にお見受けできました。

ある晩、私が冷えたビールを持って襖に近づくと、原川は「あの女顔がひどく腫れていたな」と言っていました。小林は「容赦ないからな、奴も」と言うのですが、何のことやら私にはわかりませんでした。そして、だんだん小林が原川と夜出かけるようになり、家には私が一人で、がらんとしてしまいました。

冷えたブロッコリーが小林は好きでした。よくお酒を飲んだあとに食べていました。それが冷蔵庫に入ったきりで、次の晩に捨てて、また冷やします。家を空ける日が多くなりました。

一度、小林に「どこに行っていらっしゃいますの」と聞きましたら、「男の道楽に口を挟むな」と怒られてしまいました。

原川がまた来て、小林も居たので、今晚はどこにも行かないのだな、と思い、冷蔵庫からお肴を出してきました。すると、原川は「奥さん、こっちに来て、男の馬鹿さ加減がわかるから」というのです。私は嫌だったのですが、一緒にいることにしました。すると、卵とかピンポン球を…

――言わなくていいです。

――そのようなところに行っているのだな、とやっと分かったのです。小林は私の困惑した顔を見て…ひどいことを言ったのです。そして、原川と一緒に大きな声で笑っていました。

そんな時父親や母親がいかに恋しかったか…。小林も赦せませんが、原川がいけないのです。

そして、彼はだんだん仕事に熱を入れない人になってしまいました。あのはつらつとした顔が好きだったのです。それが、その時から変な人の顔に変わっていくのが分かりました。

――目が変になっていったでしょ。

――ええ、こう、なんて表現したらいいのでしょうか、指名手配犯の目とは違いますし、神経を病んだ人の目とも違いました。なにやら、別世界の人の目のように、変わってゆきました。人で無いような…

——その頃旦那さんはどこに行っているか分かりますか？

——なにか、「ミナモト」とか言っていましたか、「ご神託が」とも。

——なんでしょうね。

——私にも理解できません。

——その原川っていう人とは付き合っていたのでしょうか？

——いいえ、もう付き合っておりませんでした。あの当時ですと

——あの当時ですと、もう教職を辞めてしまいました。そして、布団の中に一日中入っていました。そして、だんだん子供のような感じになって、汗をびっしょりかいて、「ぼくがいけないんだ、ぼくが」とか私の手を握って、「一緒に来て欲しいところがある」とか、言いました。

——それが、ここですね

——はい。

——どこから入ったのです？

——それを洩らさないように、こうして喋れなくしたのです。

——さあ、自由になるときですよ。

そして、兵隊は妻から出て、キャップを被せた。すると、妻は手話で感謝をし、地面に消えた。

それから兵隊は脳信号で、小林がなにやら悪夢の源泉を知っていると伝えた。そして、早く小林を捕獲し、尋問させることだ、と言った。

一方、他の兵隊らの脳信号では、大半の局員と協会員は処理した、順調に処理できたと伝えた。あとは小林が本部の建物にいるだろうから、それを捕獲し、尋問するだけで、残りの局員、協会員は容易であり、時間と手数がかかるだけであると伝えた。

小林は本部の建物にいた。連絡が入るが、いずれも協会員がなぜか消えているというもので、小林先生の考えに嫌々従っているの、この機会に逃げたのではないのでしょうか、と言う耳障りな連絡事項であった。小林は劣勢を感じ取っていた。

数多くの兵隊たちは本部に隣接するキャベツ畑から姿を現した。もう取締局の監視も無くなったため、脳信号を使う必要が無くなった。

「本部にいるだろう、尋問のあとはこの建物を破壊してしまおう」

「それじゃ、分けよう、破壊する方と、捕獲、破壊の方は、仕掛けだけ。いいね？」

モグラには序列がない。思いついたものに反論がないなら、それが決定された行動になる。そして、モグラには集合はない。一同がどこかに会することはない。脳信号のやり取りで済むためであるし、集合することで、今はいない取締局の摘発を逃れることができるためだ。単独の行動をモグラはしていた。

事務員は慌てていたが、突然窓を割って飛び込んだモグラが事務員を抱え、地面にあっという間に潜ってしまった。

「さてと、どう破壊しようか」

「火薬はあんまり知らないし」

「よく TNT とかいうんだが、よく分からん」

「危ないだろうから、やめて、違う方法で破壊しよう」

そして、モグラは手作業で解体しだした。

「切りがない」

「疲れる」

黒いコートの男は空中警察を「消して」いった。そのため、うるさい蠅のような空中警察は殆んど能力を失った。キャベツ畑にゆっくりと降り立ったその男は懐に抱えた赤いネットを持って、本部に近づいた。そして、兵隊が座り込んでいるフロアに入って、ネットを放り投げて、再び外に出て、空に飛び立った。

「これなんだろう」

「こいつを使おう」

「本で見たことがある」

「私たちは手にできないものだ。リニアビルに入れないように。」

「で？」

「こいつを手間取るが、本部の天辺にかける。それで消える」

「ネットだ」

「小さい」

「バクテリアのように、溶けるようにして、消える。小さくていいんだ」

「小林を探しに行こう、本部処理は後でかまわないだろう」

小林の捕獲に殆んど兵隊は加勢した。私もユキもここへ出ることができた。

小林の拷問部屋にはたどり着くのではあるが、なかなか小林の自室には至らなかった。

「どこにいるんだ」

「この回廊の上が拷問部屋だろう、そうすると、この近くにあるはずなんだが…」

フルフェイスの兵隊が妻の情報を伝えた。

「で、お前はどこから出たんだ？」

「ここだが、変だ、壁になっている」

「まさか、あいつも潜れるのか？」

「いいや、潜れないはずだ」フルフェイスの兵隊は言った。

その頃小林は壁を何層にも拵えていた。そのため、電話ボックスのような空間の中に小林は身を潜めていた。

フルフェイスの兵隊は、

「いや、まちがいない、ここだ」といって、壁に飛び込んだが、弾き返されてしまう。

「なんだ？」

「いや、入れない」出てきたフルフェイスの兵隊は言った。

「あれを使おう」

太った兵隊が、一階のフロアから、ネットを持ってきた。汗だくで、息切れしていた。

「苦しいね、はい、どうぞ」ネットを放り投げた。

「安全なのか」

「これを壁に押し当てれば…」と太った兵隊が押し付けると、一瞬にして、壁がどろどろ溶けて、小林が現れた。巣穴に潜った鼠が行き場所を無くしたかのようであった。

一人の兵隊が乱暴に小林の胸座を掴んで引きずり出した。そして、思いっきり殴りつけた。それから尋問が始まった。

「あの取締局っていうのはなんだ？」

「あれは送られてきているんだ。私がこの世界で動きやすいようにだ。」

「誰から」

「知らんね。部下のようであり、上司のような、そんなもんだ。」

「我々が知らんとでもいうのか、もう一つの世界からだろ」

「知らんね」

「じゃ、話を代えよう」

「どこから、お前に命令が来るんだ」

「知らんね」

「そうか」

小林を殴りつけた兵隊は、小林の顔につばきを吐いた。

「もう、協会員も助けない、取締局は全滅だ、全て話せ」

「なにをだ」

「悪夢の源泉についてだ」

「それを知ってどうしようと言うのだ」

「破壊する」

「破壊？」小林はけらけら笑った。「破壊だと？ここがいくら夢の世界でも夢を見るとはな！教えてやるよ、夢の世界の構造は、上層に向って伸びている。一層目、二層目、三層目、だんだん上層に向うにつれ人間の理解を超える。見たこともない人が出てくるし、たいがいは忘れて目覚める。二層目が限界だ。三層目になると、人間のもつ感覚、つまり視覚、聴覚、嗅覚、味覚、そういったものでは捉えられなくなる。二層目でたいがいは警告を受け、人間は一層目に留まる。タルティーニの『悪魔のソナタ』も一層目の経験だ。」

「悪夢に関して話せ」

「断る！」

「おまえは行ったはずだぞ」

「だから断ると言うのだ」

フルフェイスの兵隊が小林の妻に関して話し始めた。すると、小林は涙を流しながら

「行かないほうがいい、やめとくんだ」

「いいや、ダメだ、案内しろ」

小林の襟首を掴んで、開かずの間を案内させた。それは、一階の奥まった所だった。はじめ小林はとても嫌がったが、乱暴なモグラの扱いとその勢いにただ従い、案内することにした。

重いスチール製のドアを開けると、真新しい厚い板でふさがれた壁の前で止まった。

「ここか」

「そうだ、しかし、知らんぞ、どうなっても」

「そんなことはどうでもいい、開けろ」

事務員と小林は板を剥がしていった。

小さな入口があり、ちょうど人が這いつくばっては入れるくらいの大きさで、洞窟のようだった。中には御札がたくさん貼られていた。

「入れ」

「お前たちから入れ」小林は言った。

小林は蹴られて中に押し込められた。兵隊と私とユキは中に入っていった。湿っぽい墓のような雰囲気が続く、暗闇であった。そして、しばらく進むと、三味線の音が大きくなってきた。激しい撥さばきだ。

入口の先端は階段になっていて、上方に向かって伸びていた。窮屈な格好で階段を上った。上りきると、視界が開けた。とても理解できない光景が続いた。

三味線は右側からするので視線を向けると、宿場みたいに戸がなく、足を洗ってもらうものの隣で、白い綿布の上に男がうつぶせの格好で、両手、両足を雛人形が押さえつけている。その雛人形は小さくなく、誰かがお面を被っているのだった。三味線を弾く女はお歯黒で、蛇のように長い舌を出したり、引っ込めたりしていた。着物にはたくさんの御札が貼ってあり、三味線にも貼ってあった。仲居だろうか三味線を弾く女の後ろの襖を開けた。すると、その先は黄金色に輝く小麦畑になっていて、地平線が遠くに見える。空が血液のようにどす黒い。手前には先ほどから男がいて、按摩が肩、腰をマッサージしている。マッサージが終わると、雛人形の一つが、男の背中に鍵状の金具で引っ掻いた。その男は既に何箇所も背中に傷口があり、そのふさがって間もない傷口をなぞるようにして、引っ掻き傷を拵えた。三味線は男の叫び声を消そうとしていた。その宿場の主人が指差しをしていた。小林は肯いて、先に進んだ。

とても大きな木造建築のビルが伸びてきた。このビルは明治時代の建築をそのまま残したのだという。そして、その上方から若者が手を振っている。若者のいる階は四面に何もなく、柱だけが剥き出しになっていて、盛んに手を振っていた。そして、彼は誰かに突き飛ばされた。

落下して、血だらけになって、「助けてくれないんだ、誰も」といって微笑んだ。「だから、来てくれって言ったんだよ」そのため、私たちは上階に向って昇っていった。ギシギシと古い、艶のある階段を四角を描くように上って、突き落とされた青年のいた階についた。すると、そこでは講義が行われていた。生徒は四方八方を向いて、教師だけが教壇から、後方を望んで喋っている。小林が「これはまともじゃない」と言った。

なんとすることは無い教師が喋っているのは意味不明で、理解できない話で、支離滅裂だった。すると、一人が立ち上がり、一人を突き落とし、また…というようにしたため、建物の下は死体だらけになっていた。

教壇の教師が黒板になにやら書き始めた。「この先へ」と書いて、すぐに消した。小林は首を振り、「まだ序の口さ」と言った。

木造建築の周りには白衣を着て、マスクをした何人かが死体の処理をしていた。

先に進んでいくと、急に息苦しくなった。イソジンのうがい薬のような液体が鼻と口から入ってきて、肺まで満杯になった。とても苦しいが、先へ進めた。石垣が左にあり、下り坂になっているところに来ると、葬儀を行っていた。地下鉄会社の社長が死んだというのだ。喪服を着た人が遺影を持って上がってきた。遺影の写真は遠い昔に会ったことのある顔に見えた。「苦しいでしょうが、銀座線という手もごさいますから」と婦人は言った。言葉の意味がつかめないが、地下道を私たちは歩いていた。どうやら地下鉄全線が下水で繋がっており、息さえ止めれば、好きな路線に出られるらしい。

地下鉄から出て、その会議室へは簡単に行けた。会議室にはもう大勢の人が待機しており、皆待ちくたびれ、イライラしていた。私たちは会議室の奥に腰掛けた。人が異常に多く、息苦しかった。いったい何を待っているのか知らないが、これでは会議どころではない。通路、前方、椅子、全てに人がぎっしり詰まっていて、身動きが取れない。布団を被って、丸まっている者もあるし、爪を齧っている者もいた。齧りすぎて、その爪はもう無かった。一斉に拍手が起きるが何も現れない。一人の男は目つきが血走っていた。そいつが小林を掴んで持ち上げると、小林は皆にもみくちゃにされ、前方に運ばれた。会議室のドアが開き、軍服を着た男が入ってきた。小林は泣いていた。「ぼくがぼくでなくなっちゃう」と叫んだ。軍人は小林を音の出る赤ん坊のおもちゃやベロベロバーをして、あやすのだが、会場からは「やっちまえ！」と怒号がする。写真機で映している者もいた。軍人は懐から聴診器を出し、小林の頭の音を聞いている。小林は必死に何かを軍人に頼んでいる。しかし、軍人は首を振る。軍服に小林がすがりつくが、軍人は無言で首を振る。小林の泣き叫ぶ声はドアの向こうに消えた。会議室を私たちはあとにして、外に出ると、小林がしゃがんでいた。「なにがあった」と兵隊が聞いたが、小林は答えない。小林は、「もうこの先にはいきたくない」と言った。「あとは勝手に進め」と付け足した。しかし、引きづって引っ張った。

とても長い階段が気の遠くなるほど続いていた。「ここを上がるのだろうか」兵隊が言った。一人の尼僧とシスターがやってきた。手を振り、上らせないようにして、「この先は大変危険です」と警告をした。小林に聞いた。「やめとけ」と呟いた。

兵隊は「ダメだ、来るんだ」と言った。階段は石段もあったし、板もあった。幅は細いもの広いもの様々だ。階段の板には、ぼろ布を被せてあったり、ビロードが被ってあったり、新聞紙が糊付けされたりしていた。階段自体に統一性が無かった。

長い階段だった。空は依然とどす黒い血液の色をし、灰色の雨雲がものすごいスピードの渦を巻いていた。

右側には一段高いところに廊下が飛び出しており、その板の端には皮膚のついた毛髪がこびりついていた。

「ここが二層目だ」小林がいった。「私はここで諦めた」

「どういうことだ」兵隊が言った。

「通常の神経じゃ耐え切れない」情けない声で小林は言った。

私たちは廊下を進んだ。小林は行きたがらないが、兵隊は無理に引っ張った。廊下には天井があり、その天井には子供が描いたにしては奇妙な落書きがあった。それは目だけが異様に大きい顔で、それに比べ身体は腕も無ければ足も無く、誰かに髪を捕まれている絵だった。

下に階段が伸びていた。降りると、そこは浜辺の潮風にさらされ傷んだ家が一軒傾いて建っていた。私たちは中に入った。

するとそこには子供の指をくしゃくしゃ食べている女がいた。その子供は失った指のまま首の無い人形の足をハサミで切断していた。「煮込みはいかがです」と女が言った。

私たちは外に出て、歩いた。道端に腐乱した死体がごろごろ転がっていた。それらはガスで風船のように膨らんでいた。それらの死体は必ず外傷があった。

その他、女を苦しめている小屋もあり、逆に男を苦しめている小屋もあった。ここには外傷も無く普通に歩いている者が行き来して入るが、皆楽しんでいて。ちょうど何処かの地下組織の開催する一部のマニアが集うショーのように観察している。動物の足を切断する映像を食い入るように見る人間、あるいはビデオが上映され、麻酔で眠らせた女を解体するものがあり、壁には「このビデオは、好評につき完売！」と書かれ、そのビデオを購入した匿名の人間、そのような人間の心にだけある、この世の触れてはならぬ暗闇の世界が開放的に行われている空間であった。小林が夢世界で行うこと以上のことをこの空間はタガが外れたように、自由に行われていた。耐え切れない情景が続いた。

これでは小林の精神構造も変化してしまう、そんな世界だった。

小林は「あそこに見えるだろ、二層目の神殿だ」とハンカチを口にして苦しそうに言った。「私はあそこに入った。ここの二層目の事は全て経験しなくてはならない。」小林の指し示す建物はごつごつした岩の転がる荒れた大地の上に建つ白い神殿だった。陽炎で幻のように見えたが、その白さは気違いじみた光を放っていた。

「あの神殿を調べよう」兵隊が言った。

ユキは「ちょっと、わたし帰りたい、ここ酷過ぎるわ、この子さっきから私の袖を引っ張ってる」と言った。

小林は「絶対、神殿には入るな、それだけは敵であるお前たちに言う、同じ人間として」と言った。

兵隊が「この上層には何があるんだ、いったい」と震えて言った。

小林は「知らない、知ろうとも思わない。知りたくない。私も親の庇護にあった子供時代もあった、普通の人間であった頃もあった。ただ言えることは、ここの上層には悪夢の源泉がある」

小林と兵隊、ユキ、それと私が出てくると、本部はネットによって溶解していた。そこは、ヘドロのような半固形の液体が堆積していた。ただ一ヶ所、今しがた出てきた「入口」だけは残っていた。

跪いた小林は小さな声で、「こんなことをしても…こんなことをしても」と囁き、クスクス笑い出した。

「こんなことをしたって無駄なんだ！いくらだって作れる、組み立てることができる。お前たちは源泉を知ったはずだ！知らないとは言わせないぞ！あれは真理、真実、本当のことだ、全ての回答だ！しらばっくれるな！

私たち人間は狂ったサルとして始まった。ああ、そうだ、狂ったサルだ。そして、他の違う道をたどる可能性のある人間の枝を滅ぼした。絶滅させた。そして、我々は生き延びた。しかし、不安だった。雷、地震、豪雨、嵐、津波、感覚器官が空白だから怯えつづける。外界にあるのは恐怖だった。絵を描いた。怖くて、洞窟に絵を描いた。そして、人間の似姿として天空の者を創造した。怖かった、不安だったのだ。我々の脳は大きすぎた。そして正気を取り戻すべく妄想を共有した。

共有しないものは別の妄想を作り出した。そして、我々は大地を歩き回った。希望をもって。

しかし、不可能だった。あるのは有限の世界。現実は少しも変わらない、我々を脅かす。そして、外界との接触を拒んだ。あるとき、外界を変えようと考え、またあるときは、内なる世界に期待した。全てが無理なんだよ。無限の世界を描けない。内界は膨張し、外界に手が伸びる。外界は我々の都合のいいように改造された。人工の楽園を作ろうとした。

私たちは内界と外界を広げていった。世界を人類の色彩に染めていった。他の哺乳類は人間に従うどころか逃げ回った。それを人類は知らない。なぜ彼らと共存できないのか。私たちは既に動物からの切り離されたのだ。霊長類という妄想で安心してきたんだ。

よく聞け！地潜りども！

狂気こそが我々の心に宿りつづける。これは宿命なのだ。

狂気こそが我々の支えだった。

全て人類の創造物は狂気の表現なのだ！

現代ですら不安を解消と懸命になっているではないか！音楽、映像、言葉、娯楽、その全てが不安を埋め合わせする産物なのだ。

死を怖がる。死を恐れる。それさえも証拠になるはずだ。そして、死後の世界も描く。蠟燭を灯し続け、暗闇の中にいることが耐えられないのだ。

時計を見たまえ。時刻表、交通規則、法律、手続き、全てが混乱を嫌う証拠だ！

そうだと、私たちは太古から連綿と続く狂気からの逃亡を望んでいた。大多数の狂気を正気と置き換えた。そうでもしないと生きていけない。多数決を考えだし、人類の尊厳というフィクションを思いつく！全ては作り物なのだ。全ては人工の秩序なのだ。

現実を見たまえ。戦は止まないではないか！他の人類を絶滅させ、狂ったサルの血筋を受け継いだからだ。遺産なのだ。

まだ分らんのか！教えよう！この地上に神の遣いはいると思うか！教会にいると思うか？聖書を読んです？まだ読みきれないのか？もう2000年以上経過しても読めないのか？そんなもん捨てちまえ！

仏典の解説？いつ解説が終わる？

我々は救われないのだ、諦めたまえ！見放されたのだ！見捨てられたのだ！気づきたまえ！」

全てを言い尽くした小林は破壊された協会本部の敷地に、便器のように残っている「入口」の端に立った。

「全ては上からの通達だったのだ」小林は呟いた。

そして、その「入口」に潜っていった。

「入口」は何も音を立てず、そのままそこにあった。誰もが入れるくらい親密にそこにあった。

一人の兵隊がネットをかぶせ、入口をふさいだ。ブクブク泡立ち皮膚病のような盛り上がり方をしたかたまりになった。モグラの兵隊は姿を消した。

私とユキは村長の家の前に出た。

「これからどうするの」とユキがいう。

「知らない、とにかく現実に戻ることにするよ、一緒に来るかい？」と私は答えた。

ユキは少し俯いて、笑顔で

「私、ジャンクには言ったんだけど、ここで孤児として生きてきたのよ、村長に可愛がられて、あなたとも一緒になれたけど、ここにいることにする」

「じゃ、分かれよう」

「握手よ」

「そうだ」

兵隊は、少し離れたところで見守っていて、私たちの話が終わると、一人の兵隊が手招きをし、私は走っていった。

兵隊は「人工の出口を拵えた、そこで出られる」と言った。

私はユキを遠くから見ていた。ユキは村長の家の入口に立つと大きく私に手を振って、ドアを開け、中に入った。

リニアビルの上層に黒コートの男は座っていた。モグラたちの遣り残した取締局まで飛んでいった。そして、降下し、屋上に静かに降り立つと、ネットを広げた。しかし、男は何回か瞬きをし、溶解を見届けることなく、飛び去っていった。

私は、モグラの兵隊たちに京成電鉄の上野公園の博物館動物園駅に案内された。ここの地下鉄の駅はかなり凝った作りではあったが、閉鎖されている。夜、その駅を見ると、まるで要求を叶えられずにもんどりうつ幽霊が顔を覗かせ微笑むような感じだった。そこに私は入っていった。背丈の大きな男が化学消防隊のような防護服を着てせわしなく動いていた。

「これで何人目だ？」男は言った。

私は懐を広げて待つ一人の男に抱えられ、マンホールほどの穴で、人工衛星に貼り付けられるような金のフィルムで覆われた中にゆっくり降りていった。ワイヤーが音を立てる。災害に遭ったときに助けてもらえるのもこんな感じだろう、と思った。

「ま、これで戻ってこなくなれる。現実に戻れるんだ、安心して」

どのくらい潜っただろうか、

「さ、黄色いキャップを渡して…」素直に男に渡した。

「あとの人々はどうなるのですか」

「心配しなくていい、助けるだけ助ける」そう言って笑った。

私がよく行っていたカフェラウンジがある。久しぶりに寄ってみた。ママがあたたかく迎えてくれた。カウンターに腰掛けると、新しい女の子がいた。店内には音楽が流れていた。

「この曲なんていうの」

「西田佐知子のコーヒールンバ」

「いいね」

「古い歌よ、何にする？」

「マンデリンがいい」

「わかったわ」

どこかユキを思い起こさせる雰囲気だった。たしかに私は現実におろした。夢の中の記憶は砕け散って、思い出せなかった。今までの全てのことにはもう触れることができなくなってしまった。それはそれでいいと思った。

「夢ってどう思う？」

「不思議ね」

「長すぎる夢を人は見るものだろうか」

「昔読んだことがあるの、眠ると人は魂が抜け出して夢の世界に入っていきって。昔の人はそう考えていたみたい」

「普段どんな夢を見るかい？」

「内緒」

「ああ、そうだね」

「でも、夢って不思議よね、まるで別世界があるみたい」

ホールから大きな歓声がわいた。熱気が徐々に満ちていった。ママが皆に迎えられ、ママは両腕を上げて、器用に回転する。そして、人々の中に消えていった。

(了)